

民族舞踊文化



No. 14

2002年5月14日

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

財団法人 黛民族舞踊文化財団

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F TEL 03-3583-3633(代)
FAX 03-3583-3639



アジア民族舞踊交流会 ニ西情舞（チベット族舞蹈）

民族舞踊交流の一層の発展へ 決意を新たに

財団法人 黛民族舞踊文化財団
理事長 犬丸 直

新しい世紀の初めの年に、世界のひとびとの心に大きなショックを与える事件が勃発したことは、誠に残念におもいます。いかに信ずる宗教や原理が異なっても、人間の心は相通ずるものを持っており、相互の努力で理解し合い、和合することができるはずです。世界の民族舞踊はまことに多種多様であり、一見して異様に感じあるいは美しいと思うことができなくても、互いに鑑賞しあい、学びあううちに、そこに込められた心情を感じとり、自己の知らなかった異種の美を受け入れ、それを見聞しまた習得することに喜びを感じようになるはずであります。民族舞踊文化交流の推進は、民族的あるいは宗教的偏見による非人道的な事態を防ぐのに効果の大きい事業のひとつであると信じます。

故黛節子先生が始められた日中民族舞踊文化交流も、着々と功を積んできて、今年は当財団より第7次の訪中舞踊団15名が中国へ出向いて交流を行うこととなりました。

昨年来日された麻衛軍団長以下8名の雲南省舞蹈家協会第九次訪中代表団のわが国における交流活動の状況は、次頁以下に報告されているとおりです。

雲南省舞蹈家協会第九次訪日代表团 アジア民族舞踊交流会

2001年6月30日～7月11日



右より

麻衛軍訪日団団長
犬丸直当財団理事長
呉甘訪日団団員
大野晃当財団常務理事



佐々木文化庁長官と訪日団

【訪日代表团メンバー】

団 長	：	麻 衛 軍	男性（漢族）	雲南省文学芸術連合会秘書長
団 員	：	李 文 義	男性（ナシ族）	雲南省舞蹈家協会会員
〃		岳 亜 明	女性（漢族）	雲南芸術学院舞踊学科主任 副教授
〃		呉 甘	女性（漢族）	楚雄州歌舞団副団長 演出家
〃		李 曉 偉	男性（ラフ族）	思茅地区民族歌舞団副団長 演出家
〃		斯 諾 沢 仁	男性（チベット族）	迪慶州群衆芸術館副館長 演出家
〃		秦 国 華	女性（ナシ族）	麗江地区青少年宮副主任
〃		李 劍 鋒	男性（漢族）	峨山県文工団団長

《アジア民族舞踊交流会スケジュール》

2001年

7月3日（火）18:00	舞踊交流会	新潟市天寿園
7月5日（木）18:00	舞踊交流会	藤沢市民会館ホール
7月6日（金）14:00	公開レッスン	群馬県新田町文化会館エアリスホール
7月7日（土）14:00	舞踊交流会	群馬県新田町文化会館エアリスホール
7月8日（日）14:00	東アジア舞踊の 研究会・シンポジウム	学習院創立百周年記念会館（目白）
	16:00 舞踊交流会	学習院創立百周年記念会館（目白）
7月9日（月）14:00	舞踊交流会	長野県松本市林友渚カナディアンホール
出 演	中国雲南省舞蹈家協会訪日代表团・創舞芸術院金梅子・黛民族舞踊団	

民族舞踊交流会記録

6月30日（土）

中国雲南省舞蹈家協会第九次訪日代表团麻衛軍団長以下一行8名は15時20分着C A 929便にて定時より早く成田空港に到着。午後7時から当財団のスタッフが待つ赤坂飯店で日本の中華料理による歓迎の宴に出席。翌朝の予定が早いので、代表团は都市センターホテルに戻り早めに各自の部屋に入る。

7月1日（日）

朝8時に東京を出発して東北新幹線で岩手県の新花巻駅に着く。鹿踊り保存会の皆様の出迎えを受けて東和町の会館に伺う。ここは何年か前に前理事長が訪れた所で万感胸に迫る思いがする。久しぶりの再会を喜びあい、すぐに鹿踊りの取材に入る。10種類もの鹿踊りを見せていただいた後、保存会の皆様の用意した食事をいただきながら懇談会に移る。大野常務理事のあいさつ、鹿踊り保存会の小原代表のあいさつと、質問などのトークを交えて過ごした。最初は緊張していた保存会の若者たちも訪日団の乾杯の攻勢にしだいに打ち解け、おたがいの国の歌を歌い合ったり、イ族流の腕を組んでの乾杯を繰り返したりして楽しい交流の時を過ごした。

会館を出た後、“祈りと信仰”をテーマにしているふるさと歴史資料館を見学する。この地方ではすでに縄文時代においても独自の文化が発達していたことが熊の顔スタンプ、男性土偶、特殊注口土器などの出土遺物からもうかがうことができた。また民間信仰ではオシラサマ、マリノホトケ、カマドガミなどのように、南部と伊達の両方に別個に育ってきた文化が融合されている様が語られており、総じて印象に残ったのは東和町の歴史を表すには祈りと信仰は欠くことができないということであった。

保存会の皆様に別れを告げ、新花巻駅より次の取材地の平泉町毛越寺に向かう。そこで毛越寺貫主、藤里慈亮先生のご子息、藤里執事長にお目にかかり、再会を喜び、その夜は宿坊に泊めていただく。

7月2日（月）

7時朝食。毛越寺の美しい庭園を散策する。11時、かつて前理事長も、中国の劉金吾先生もお会いしている毛越寺貫主藤里慈亮先生とお目にかかることができた。藤里先生の「黛先生のあとを財団の皆様が



毛越寺本堂にて藤里執事長と訪日団

ひき継いで日中交流を続けていることに感激しています。今後ともこの交流を永くつづけてください」というお話しに、訪日団員も改めてこの交流の持つ意義を感じたようだった。

この日、毎年正月20日と5月の曲水の宴にしか奉納しない「延年の舞」を特別に常行堂で見せてくださり、訪日団も雲南少数民族の踊りを2曲披露した。

貫主の藤里先生もチベット族の踊りはどこか神秘的な祈りが感じられ、延年の舞などと共通の思いがあるように見えると申されていた。岩手日報の取材も入り、2日夜のニュースに報道された。

なつかしい毛越寺を後にして中尊寺に向かう。訪日団の団員も国宝の金堂に目を奪われていた。中国にも寺は多いがこのように光り輝く金堂はないとのこと。

毛越寺から車で一関駅に向かい、東北新幹線で東京に戻る。



左から 大野常務理事・通訳洪恵明・藤里貫主・麻団長



毛越寺常行堂にてチベット族舞蹈黒帽舞を奉納

7月3日（火）

故黛前理事長の念願だった新潟公演を新潟支部の暖かい後援によって実現する事ができた。

車中で朝食をすませ、上越新幹線で新潟へ。新潟支部の皆様の出迎えをうけ、バスで先ず新潟の海を見る。佐渡ヶ島は見えなかったが、日本海の荒波を間近に眺め、海岸をこころゆくまで散策することができた。カナダからとりよせた鮭で有名な加賀屋で昼食をとり、天寿園へ向かう。

天寿園は新潟市が中国との友好を記念して造られた施設で、日本庭園と中国庭園が調和を保ち、“穏やかに心踊る”というモットーを持つ美しい会場である。ここでリハーサルをすませ、3時に最初の交流公演先である県立中央高校へ。

この学校のダンス部は長い歴史を持ち、全国大会にも出場し、数々の賞ももらっているという。

訪日団が2曲披露したあと、中央高校のダンス部の生徒たちが日中交流にちなんで「空海渡海」と現代的な振り付けの創作ダンスを見せてくれた。第一曲は荒波のうねりをしなやかな手と体の動きの群舞で表現し、その波の上に平安時代に中国に留学した僧、空海が浮き出る様が幻想的な雰囲気を醸し出していた。また二曲目のモダン・ダンスでは、踊りの最中に機械の故障でバックの曲が途切れたにもかかわらず笑顔を絶やさずに最後まで踊り切ったダンス部員たちに訪日団のメンバーも惜しめない拍手を送った。

夕方6時より天寿園での本番。黛民族舞踊団、雲南少数民族舞踊家、民謡光延会の皆様による舞踊交流会が開かれた。交流会の終了後、鳥屋野潟の湖畔の宿では懇親会ももたれ、訪日団員たちが雲南の歌を独唱し、光延会の三味線の伴奏で皆が踊りの輪をつくる等くつろいだ時間を過ごすことができた。なおこの交流会を開催するにあたり、新潟支部で市民の中からボランティアを募り交流会の運営等のお手伝いをお願いした。新潟大学の先生をされているロシア人の一家等多数に参加され皆積極的に働いていた。今後の文化交流の方向性を示唆する貴重な試みであったと思う。



新潟市の海岸にて

7月4日（水）

朝早く新潟の皆様と別れをつけ、上越新幹線で東京へ。

午後は世界各国の民族舞踊鑑賞のため東京ディズニーランドに行く。ディズニーのおとぎ話に登場する動物たちの踊りやフラメンコ・ショー等、西洋の舞踊を中心に見学。ショッピングをすませ、都市センターホテルに戻る。



新潟市天寿園にて

7月5日（木）

10時30分藤沢駅着。訪日団の一行は湘南日中友好協会の小松碧さんの出迎えをうけ、さっそく聶耳氏の記念碑のある鵠沼海岸へ行き花束を捧げた。中華人民共和国国歌「義勇軍行進曲」の作曲をした聶耳氏は1912年に雲南省昆明の美しい湖のほとりで生を受け、少年期から音楽の方面で才能を示し、短期間に映画や舞台劇用のすぐれた歌曲を多数作曲したが、日本に留学中、24才の若さで惜しくもこの鵠沼海岸で水泳中に命を落とした。聶耳氏の事は雲南省の芸術家たちは皆知らない者はいない。

一行はその後江の島水族館を訪れ、マリンランドのイルカショーや、中国の揚子江にいるカワイルカの写真を見る。カワイルカは絶滅を危惧されている貴重な動物で、ここの水族館は現地の水族館にイルカ飼育のノウハウを提供するなどして希少動物の保護に協力しているという。

今回、藤沢市民会館ホールでの交流会は藤沢一昆明友好提携20周年記念として開催され、中国の他、韓国の金梅子（キムメジャ）先生も参加して頂き、日中韓三国の交流会となった。

7月6日（金）

浅草発10時58分の東武電車で群馬県の太田市に向かい、そこから新田町の迎えのバスで文化会館エアリスホールへ。

午後2時新田地区との民族舞踊交流会、公開レッスン、シンポジウム、訪日団は現地の民謡の木崎音頭を教わり、左脚舞を教える。

7月7日（土）

10時30分、交流会準備。前日と同じくエアリスホールにてリハーサル。午後2時本番。盛会のうちに午後4時終了。高橋館長からおみやげをいただき午後6時新田町を離れ東京へ。

7月8日（日）

学習院大学東洋文化研究所アジア文化研究プロジェクト、黛民族舞踊文化財団との共催の交流会並びにシンポジウム会場に午前11時頃到着。昼食後リハーサル。

午後2時より東アジア民族舞踊の研究会・シンポジウムを参観。学習院大学文学部の諏訪春雄教授の司会のもとに、パネラーは訪日代表団麻衛軍団長、舞踊評論家如月青子先生、韓国舞踊家金梅子先生、

黛民族舞踊文化財団大野晃常務理事によって

1. 各舞踊団の紹介、結成の経過、歴史、目的など
2. 基本的なレッスンの方法、初心者をもの様に訓練するか
3. 身体による表現方法、喜怒哀楽の感情その他をどの様に表現するか
4. 民族舞踊と新作との関係、民衆が伝えた舞踊と新作又は改作の舞踊との関係をどう考えるか
5. ゲストコメンテーター（中国舞踊研究者）による感想・意見発表

以上5点について、討論がなされた。

午後4時よりアジア民族舞踊交流会。お客様も多く盛況のうちに幕を閉じた。中国大使館文化部の張愛平参事官もアジア文化研究プロジェクト主催の歓迎パーティーに出席され、学習院の諏訪教授も大変よろこばれてたのしいひとときをすごした。



藤沢市民会館ホールにて



新田町エアリスホールの体育館における公開レッスン

7月9日（月）

午前9時、新宿発特急あずさ53号で長野県松本市へ。訪日団員の一人は信濃路の景色は中国に似ているので田舎の一家庭を写真にとりたいといていた。

松本で林友の穂苅甲子男社長（当財団の評議員）の出迎えを受け、松本城・市内わさび苑などを見学して午後4時林友渚カナディアンホールでリハーサル。午後6時より松本日中友好協会（穂苅甲子男会長）創立20周年記念の舞踊会「中国雲南省少数民族の夕べ」を開いた。黛財団で招聘した雲南省から少数民族ナシ族、チベット族の神秘的な舞踊や日本伝統芸能菊水流等異文化と舞踊で交流し来場者を魅了する。穂苅会長も20周年を契機に日中間の友情をますます深めたいと感謝していた。

報道関係者も多数集まり、珍しい振りや美しい色彩の民族衣裳に見入っていた。



松本日中友好協会 穂苅甲子男会長

7月10日（火）

朝6時50分特急スーパーあずさ2号で帰途につく。

午前11時、文化庁佐々木正峰長官表敬訪問。長官のお話を伺い、日本各地での交流の様子を麻団長が報告し、中国からのおみやげを差し上げた。長官からは今後ともひきつづき日中の民族舞踊の関係者が舞踊文化の向上につとめることを希望し、また、日中友好を続けるようにとの力のこもった励ましをいただき、訪中団員たちはたいへんよろこんでいた。午後6時より赤坂飯店で財団主催のさよならパーティー。

当財団犬丸理事長、大野常務理事のあいさつ、中国側麻団長のあいさつ、日中文化交流協会の横川氏のあいさつの後橋岡久馬先生の音頭で乾杯。中国の女性たちは遠藤さんの着付けで今回は前から念願の日本の着物を着て出席した。

中国の茅台酒などが出され、記念撮影、プレゼントの交換等を行い10日間の日程を終えた訪日団の一行はくつろいだ表情で日本最後の夜をたのしんだ。蛍の光の曲が流れる中、参加者はそれぞれの思いを胸に会場を後にした。



学習院大学東洋文化研究所アジア文化研究プロジェクトと黛民族舞踊文化財団共催のシンポジウム

7月11日（水）

訪日代表団の一行は午前中日本での最後の買い物をすませ、成田空港より午後5時発CA930便の日航機で帰国の途についた。

春日流落合鹿踊り取材記

岩手の東和町に降り立つと鹿踊りの皆様が出迎えてくれた。何年か前に前理事長と共に訪れた時を思い出し、現在は春日流落合鹿踊り長老の薄衣哲夫さんも今は亡く、その後継者には息子さんが後を継いでいた。その薄衣隆義さんは前理事長黛節子先生からいただいたセーターを見せて下さって今も大事にしていますとよろこんでいた。

その会の鹿踊りとは西暦951年ころ空也上人が山にこもり修行の折り、近くで遊びたわむれている鹿が狩人の犠牲となったのをあわれみ鹿の吊いをしたとき、村人たちが遊びたわむれている鹿の様を吊いの意味をこめて踊ったというのが鹿踊りのはじまりで、以後神社仏閣で神事として踊るようになり、春日流は岩手県東和町落合が発祥の地で、その後寛政年間に春日若宮祭に鹿踊りを奉納したとき「春日」の2字を賜ったもので現在は「春日流落合鹿踊り」として永久保存していると皆様張り切って踊って下さった。一番庭、二番庭、案山子踊り、雌獅子踊り等10種類を見せて下さった。



春日流落合鹿踊りの皆様と

毛越寺延年の舞取材記

前理事長も毛越寺を2回訪れ、藤里慈亮先生に教えをうけて、草月ホールで延年の舞を舞われているという特別な曲目である。第九次訪日団と大野常務理事とスタッフで現地取材に伺った。



毛越寺の延年の舞

その奥州平泉毛越寺の南大門趾から大泉池をへだて、金堂跡を左手に見るひろい境内の一隅に茅ぶきの常行堂が一字ぼつりと立っている。人から人に伝えられた常行三昧の古修法と延年の催しとが、この常行堂内にひそかに立派に今は継承されているということは珍しいといわれている。医王山毛越寺金剛王院は仁明天皇の嘉祥三年（850）天台宗山門派の祖、慈覚大師の創建と伝えられて根本中堂を嘉祥寺と称し、大師自作の医王善逝の霊像を本尊とし、常行堂も創立されてここで秘法を修したといわれており、たびたびの兵火や野火のため悉く焼失したが、中御門天皇の享保13年（1728）常行堂だけが再興されたという。

又延年の舞とは延年に舞われる舞という事で命を延ぶる、即ち長命ということ、平安の中頃から宴会における管弦のあそび、やがては芸能の催し、特に寺々における法会の後に催された法楽に対して称されるようになった。

《交流会プログラム》

第一部

1. 火紅的瑪櫻花（イ族舞蹈）

瑪櫻花はイ族の人々の吉祥と幸福の象徴です。舞踊は熱情的で声高らかな左足を使った踊りで、イ族の人々の持つ瑪櫻花のような情熱的な性格と、そして現在の生活への愛着と自信を表現しています。

2. 鳩間仲森

鳩間仲森は西表島北方洋上に浮かぶ周囲三・五キロメートルの鳩間島に生れた謡です。島の中岡から見た豊かな自然の景観と純朴な島人の織りなす風土をうたったものです。鳩間節はユンタから節謡に改作され、舞踊がついて結願祭の奉納芸能として発達してきました。鳩間島ではスディナ、カカンの装束にタナシイと呼ぶ打掛を用い、頭飾りもはなやかですが、石垣四ヶ村あたりではスディナ、カカンに色物手巾、四つ竹で踊るのが一般的な形です。

3. 楽悠悠（イ族舞蹈）

この踊りは南貨島の天生堂一帯の大三弦羊皮舞を取材したもので、動作は豪放で力強く、緩急があります。羊皮を使つての愛情の伝達はイ族の人々の愛情表現の一つの方法であり、それは羊皮はイ族の人々にとって貴重な品物であり、生産生活に必須のものであるということに由来しています。そしてこの踊りはイ族の青年達の情熱的でおおらか、しかもユーモアに富んだ性格を表しています。

4. サルプリ（韓国）

神に接して厄災を払う韓国の代表的な巫女舞い。白いチマ・チョゴリをまとい髪を束ねてかんざしを挿した女性が白い手巾を持って、舞台中央で舞います。

5. バイ舞（ラフ族舞蹈）

“ああ！ラフ山の象脚鼓が鳴り始めた。ラフ族の芦笙が聞こえてくる。ほらごらん、山の方からラフ族の娘たちが降りて来る。ラフ山の村の春のたよりを、春の希望を携えて…”

バイ舞はラフ族の最も代表的な民族舞踊です。祝日がやって来ると娘たちは白い頭巾を手に持って輪になって躍ります。先導者は象脚鼓の背面をたたきながら踊り、その後続く鉦(ドラ)と釵が伴奏します。



イ族舞踊 火紅的瑪櫻花

6. さいたら節

宮城県の民謡。海の男（漁師）の意気そのままに白波を蹴立てて繰り出す船。潮風に向かってほとばしる海の男の意気を表現した踊りです。

7. 芦笙舞（ラフ族舞蹈）

踊り手が手に持った芦笙を吹きながら躍るのが一般的な舞踊の形式ですが、この踊りの特長はその種類の多さと無数の変化にあるといえます。「開墾」「種蒔き」「収穫」「脱穀」「豊作」等80種以上の舞踊作品があります。

第二部

1. 勒巴舞（ナシ族舞蹈）

ナシ族の勒巴舞は麗江県の塔城等で踊られています。このあたりはへき地で伝統文化が昔の姿に近い形で保存されています。

勒巴舞の動作は粗野で豪放であり、豊作を喜び希望を表現する古くから伝えられてきた民間舞踊です。そしてこの踊りは吉祥と平安というはたらきを象徴すると共に素朴で昔ふうな原始的な衣裳、太鼓、板鼓、女鼓、ヤクの尾等独特の道具を使うことで人々の注目を集めます。

2. 小原木

新潟県刈羽郡鶴川に伝わる小原木は、慶長年間勃興した、いわゆるお国歌舞伎の型が残されているといわれる綾子舞を基に創られました。

世は戦国の動乱を経、南蛮渡りの異文化の流入とあいまって、びらんと退廃感がただよう、現代の世相に通じた興味ある時代。そうした中に生まれただろう踊りの再現を意図したものです。

3. 金色的神蛙（ナシ族舞蹈）

ナシ族の最も古く最も原始的な舞踊は青蛙舞です。民間の伝説と東巴（トンパ）経の記載によるとナシ族の舞踊は青蛙の跳躍に啓発されてできたものだという事です。

ナシ族はむかしから“金色の神蛙”という舞踊の神様を礼拝してきました。そしてそれは同時にナシ族のトーテムでもありました。ナシ族の祖先たちはナシ族の女性が身につけていた羊皮を青蛙のかたちにして身にまとっていました。そのため原始的な蛙舞が現在まで伝わっているのです。

4. 太平舞（テピョンム・韓国）

王妃が庭園で遊んでいる。闊達で、平和な様子を表現したものです。韓成俊が創作した伝統舞踊。民族的固有の音楽にのり、宮中衣裳で舞います。

5. 黒帽舞（チベット族舞蹈）

チベット族の人々はその多くがラマ教を信じています。解放後、中国共産党と政府は信教の自由という政策を堅持し、正常な宗教活動は国家の法律の保護を受けています。私たちは“黒帽舞”を通して皆様にチベットの宗教活動を一幅の情景としてお見せたいと思います。

6. 棒踊り

鹿児島島の指宿に伝わる踊りで、農民は身を守る為に棒術を身につけました。その棒を使いながら踊る勇壮な踊りです。



ラフ族民間舞蹈 芦笙舞

7. 尼西情舞（チベット族舞蹈）

尼西情舞は迪慶高原に特有の舞踊の一種でほとんどのチベット族の居住区で踊られ、この地方の特色が強くでています。かつてはこの踊りは若者が恋人を探すときに重要な媒介となり、現在では大衆舞踊として広く普及しています。



春日流落合鹿踊り



毛越寺の延年の舞



麻団長と新潟支部の皆さん



新潟中央高校ダンス部の踊り



新田町エアリスホールにて



学習院創立百周年記念会館にて



佐々木文化庁長官と麻団長



佐々木文化庁長官

大野常務理事



学習院大学にて犬丸理事長と大野常務理事



左より 麻団長・中国大使館の張愛平参事官・スノ沢仁・李曉偉



太平舞 韓国舞踊家 金梅子



サルプリ 韓国舞踊家 金梅子



中国 火紅的瑪櫻花（イ族舞蹈）



中国 金色的神蛙（ナシ族舞蹈）



中国 勒巴舞（ナシ族舞蹈）



小原木 黛民族舞踊団



鳩間仲森 黛民族舞踊団



さいたら節 黛民族舞踊団



中国 芦笙舞（ラフ族舞蹈）



公演を終えて

ジノ一族博物館開館

当財団が資金面で協力し、雲南省シーサンパンナのジノ一族郷で建設が進められてきたジノ一族博物館は、このほど建物が完成し、2001年6月6日に開館の運びとなった。展示物もジノ一族の村々からの収集を終え、採集、狩猟、焼畑、服飾、歌舞芸術等のテーマ別に展示され、あわせて黛節子前理事長がジノ一族郷で踊った交流の記念の写真も飾られることになった。

つい先日、ジノ一族博物館が開館された。

ジノ一族博物館は雲南大学の尹紹亭教授が主宰する雲南民族文化生態村の建設プロジェクトのひとつとして計画され、建設されたが、この博物館は日本の友人工藤市兵衛博士、黛民族舞踊文化財団、アメリカのフォード基金および中国科学院シーサンパンナ熱帯植物園の援助を受け、パーカ・ジノ一族文化生態村建設の一部門としてジノ一族郷パーカ（巴）村につくられたものである。五十余戸、二百人にも満たない小村に建設された単一民族の博物館としては全国で初めての例である。

ジノ一族博物館はジノ一族の“大部屋”を原型としたもので、長方形の高床式建築である。階下は空いていてひき臼等の生活用品が陳列されており、かたわらに鉄職人の部屋がある。階上には展示室が8室あり、豊富な実物見本および写真などにより村落、民家、紡績、服飾、飲食、焼畑、採集、狩猟、原始宗教、生活習俗、歌舞芸術の諸方面にわたりジノ一族の特色ある物質文化と精神文化を展示している。

ジノ一族博物館は同時にジノ一族の文化伝習館としての役割をもち、青年たちがここの文化センターにおいてジノ一族の伝統ある美德や民族の文化知識、技能を学習している。

ジノ一族博物館は勐侖（モンロン）熱帯植物園から5キロメートルのシーサンパンナ東部観光地帯の中にあり、その開館によってシーサンパンナにまたひとつ新しい観光スポットが増えることになる。

（雲南省 雲南日報 2001年6月26日付記事より）



雲南日報 2001 年 6 月 26 日付記事



ジノ一族博物館全景



结束语

展示和传承基诺族传统文化，是基诺族人民的迫切愿望。在云南省各级政府的支持下，受美国福特基金会、日本友好人士工藤市兵衛夫妇、日本黛节子舞蹈财团和西双版纳热带植物园的资助，通过“云南民族文化生态村课题组”和基诺族干部、群众历时3年的共同努力，终于建成了这座集展示和传承等功能为一体的博物馆。在此，谨向关心和支持此项工作的国内外的个人和单位表示衷心的感谢！

まとめの言葉

ジノ一族の伝統文化の展示と伝承は、ジノ一族の人々の切なる願いであります。雲南省の各レベルの政府の支援のもと、アメリカのフォード基金、日本の友人工藤市兵衛御夫妻、日本の黛民族舞踊文化財団、及びシーサンパンナ熱帯植物園からの資金援助を得て「雲南民族文化生態村テーマチーム」及びジノ一族幹部、村民は3年にわたる共同の努力を経て終にこの展示と伝承等の機能が一体化された博物館をつくりあげました。ここにご配慮とご支援をいただきました国内外の個人、団体の皆様に心から感謝の意を表します。



ジノ一族博物館開館式

基诺族博物館 建設資助、協力単位及个人

日本友人工藤市兵衛博士、教授
日本黛民族舞踊文化財団
美国福特基金会

中国科学院国际合作局
中国科学院西双版纳热带植物园
云南大学人文学院人类学系

策划和建设
云南民族文化生态村项目组

2001年5月

ジノ一族博物館

建設に協力いただいた個人及び団体

日本の友人 工藤市兵衛博士、教授

日本 黛民族舞踊文化財団

アメリカ フォード基金

中国科学院国際協力局

中国科学院シーサンパンナ熱帯植物園

雲南大学人文学院人類学部

設計及び建設

雲南民族文化生態村プロジェクトチーム

2001年5月



ジノ一族の踊り

2002年6月12日～6月23日 黛民族舞踊団第7次訪中団
中国昆明・楚雄・保山市・騰冲県・怒江で日中舞踊交流の予定



保山市・和順郷（『人民中国』より）

財団法人

黛民族舞踊文化財団のあらまし

財団法人黛民族舞踊文化財団は、我が国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和61年3月文部大臣から設立を許可された法人です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡業公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者（音楽、振付けを含む）、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および中国・韓国・東南アジア諸国の民俗芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し、将来は資料館を設立して一般の利用に供

することを計画しています。また、(4)世界各国にはそれぞれ民族舞踊団が国家の庇護のもとに活動していますが、これらの舞踊団との交流や、中国・韓国・東南アジア諸国の民俗芸能伝承者たちとの交流等、幅ひろい国際交流を推進して相互の連携と研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民俗芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申ししましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。

当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ってまいりますよう、財団の事業目的をご理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申し上げる次第です。

つきましては、当財団には賛助会員規定を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費による御支援を賜りたく、お願い申し上げる次第です。

民族舞踊文化 No.14

2002年5月14日発行 発行人 犬丸 直 編集人 大野 晃

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F

Tel 03-3583-3633(代)
Fax 03-3583-3639

財団法人 黛民族舞踊文化財団

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

MAYUZUMI BLD 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATO-KU, TOKYO